

福袋

佐藤 紀子

カナダ

薄氷<sup>うすこひ</sup>が朝日を反し輝けり銀杏落葉を閉ぢ込めしまま  
渴筆に氣息こもれり禪寺の掛け軸に見る大さへ無の文字  
季節には少し早めの蠟梅がほつと咲く墓地の陽だまり  
きりたんぽを餅に見立てて作りたり夫と二人の今年の雑煮  
ひさびさに日本で過ごす正月を福袋でも買ひに出ようか

熊のエリア

佐々木 鏡子

秋田

人が減りクマが増えゆく現状をつぶさに伝ふ年初の新聞  
山里に人の営みうすれゆき熊のエリアが広がりとぞ  
長女言ふへ拝観料は要りませんはたちの孫の振袖姿  
能登半島の付け根あたりにあるといふ七百年こす長寿のつばき  
もち入りの粥はむかしの母の味あるかなきかの塩味おもふ

はつゆき

大西 淳子

\*千葉

はつゆきと聞けばほのかにはつこいのほてりをおびて耳に残れり  
昨夜ふりし雪はつもらず恋などは無かつたように今日がはじまる  
はつはるの会議資料にゴシックで書く「堅確化」いやしけよごと  
再起動できないわれら十秒でスマートフォンを再起動する  
しら梅のうえにしら雪しらしらと政治家のつく真っ黒い嘘

便所掃除

尾崎潤子 千葉

一着のコート買ひたる母の顔はればれとしてデパートを出づ  
「カテーターの使い方」二倍速で見る長女、昼寝の子のかたはらに  
「Perfect days」封切ぶゆの日の日比谷シャンテにひとりで観たり  
冬至やや過ぎて明るい午後五時の西夕空にのこるくれなる  
寝るまへに便器拭きつつおもふなり浜口国雄のかの詩のラスト

パ・ド・ドゥー

印出 美由紀 神奈川

バラライカが森の楓でありしころ夜鳴きうぐひすナイチンゲールに恋をしてゐた  
ゆくりなく切り株になりし楓かへるをおもひ鳴きけむ夜鳴きうぐひす  
はしつこく冬の空気を切りて飛ぶ鶴鴿たちの銀のパ・ド・ドゥー  
参道の坂のオ字のくぼくぼにどんぐりたちがはまつてゐるよ  
枝すべて伐られて立てる朴の幹は拳を挙ぐるフレディ・マーキュリー

津波

黒石 孝 新潟

本棚のコスモス誌一〇〇冊揺り落とし元日の地震へ5強が襲ふ  
外へ出る！と二階から子が駆け降りる、逃げる逃げろとテレビが叫ぶ  
津波来る声から逃れ高台に身を寄するわれらを呑みて聞響なる  
小泊こどまりの港の底が現れて海引きし後津波襲ひ来  
海越えて漂着したる能登の漁船浜に傾く震災四日後

二、三の未決

水辺 あお 静岡

水桶のどぢやうの浮沈眺めるき一家離散の予感のなかで  
貧しかりしころ母と住みし裏路地の雨の泥濘、晴の風塵  
これ以上はよろしいですかと目で問はれ諾ひし日が父との別れ  
越冬の水仙のごと寒風にゆだねておかん二、三の未決  
頼まれもせずに負ひたる世のひづみひとり憂へてひとり忿怒す

鍵穴

山田 恵 里\* 愛知

水飴のように時間が伸びてゆく川また川を渡り行く朝  
瓶よりも壘と書きたしバラバラのかりんのむくろを砂糖と詰めて  
鍵穴はなぜこんなにも深いのか 差し込み回す銀の手がかり  
手袋に指を差し入れ追い出した細い暗闇 去年の憂い  
夕空の赤が硬くて伸びきれぬ鉄塔は身を川面にうつす

いのちを頼む

吉本 由美 大阪

錠前を換へて五つのスベアキーふたり家族に三つが余る  
救急車に運ばれるのは三度なり今日は夫のいのちを頼む  
つはぶきの花の黄色は希望のき病棟の壁に沿ひてひらけり  
無信心の我のにはかな神頼みきいてくれるや地主の神  
入院し夫をらねば無言にて過ごし夕餉はすぐにたひらぐ

きみの味方だ

宮本 君子 広島

登り来し八幡さんより見はるかす瀬戸の海原乳色をおお  
ばあちゃんはきみの味方だ 言ひつつも大学留年の孫を案じる  
親たちの困惑よそこにバックパッカーめいてフランスへ飛んでいく孫  
初釜に着物を着たる遠き日をふと思ひだし和箆筒開けぬ  
いい味だなんども味見してしまふ初物蒔を散らすおすもじ

むりむりと

中村 仁彦 福岡

秋おそく剪定をせし薔薇の木に蕾がふたつ淡雪かづく  
双葉にて何の草かは分からねど春告げ草と名付けて目守る  
七十歳を一つ越えたりむりむりと体をつかふ頭をつかふ  
筋交ひの鉄骨すべての窓に付く首都東京の路地裏のビル  
志賀原発の外部電源止まるとふニュース小さし揺れ続くなか

人日

海老原 光子 宮崎

川沿ひの杭の被れるニット帽迎へなきまま年を越したり  
粥食べて日向ぼつこの夫の背にことさら温き人日じんじつの光  
けんけんぱ、缶けり、ゴムとび、かくれんぼ 前世の記憶のやうな土の香  
うかうかと過ぎ来し日々を悔やむまい母を追ひ抜き喜寿となる春  
白菜が歩いて来るよいく子さんをすつぽり隠しとことこ来るよ